

# 史跡有岡古墳群(野田院古墳) 保存整備事業報告書



2003.3

善通寺市教育委員会

# 史跡有岡古墳群(野田院古墳) 保存整備事業報告書



2003.2

善通寺市教育委員会

## 序

善通寺市では昭和57年度に実施された王墓山古墳の緊急発掘を契機に、市内を代表する6基の古墳が有岡古墳群として国の史跡に指定されました。そして昭和61年度から平成3年度まで王墓山古墳で、平成4年度から平成8年度まで宮が尾古墳で、保存整備事業を実施して参りました。

このような本格的な古墳の保存修理事業は県下では例が無く、整備後は県内は勿論のこと県外からも数多くの研究者や文化財愛好家が現地を訪れております。

さて、平成9年度からは讃岐固有の積石の前方後円墳である野田院古墳の保存整備事業に着手しました。積石塚で内部構造まで解明するような大規模な発掘調査や解体復元工事は国内でも初の試みがありました。従いまして、参考となるような資料は殆ど無く、手探りでの事業着手となりましたが、発掘調査によって本来の構造や当時の優れた土木技術の存在を明らかにすることができました。

そして得られた資料を基に野田院古墳を構築された当時の姿に蘇らせることができました。

その姿は、これまでの野田院古墳からは想像すらできないものでありました。古墳時代初頭にこのような巨大な石積みの構造物を造り出す優れた技術があったこと、現代の芸術家の手による巨大モニュメントを彷彿させる優美な姿が造形されていたことに大きな驚きを覚えるとともに、郷土の文化の礎を築いた先人を誇りに思います。

このたびの保存整備事業及び報告書の刊行にあたり、ご指導を賜りました諸先生各位に厚くお礼申し上げます。また、発掘調査に携わられた関係者、及び整備工事関係者の皆様のご苦労にも心から感謝申し上げます。

平成15年3月31日

善通寺市教育委員会  
教育長 勝田英樹



有岡地区全景【筆ノ山山頂から南を望む】

①野田院古墳 ②菊塚古墳 ③王墓山古墳 ④磨臼山古墳 ⑤丸山古墳 ⑥鶴が峰4号墳 ⑦宮が尾古墳



野田院古墳全景【キャンプ場(南東)から望む】

向かって左が積み石の後円部、右に盛り土の前方部がみえる。



野田院古墳全景【後円部(南西)から前方部を望む】

古墳の主軸方向からの撮影、第1主体部が中心から大きく外れている様子がわかる。  
発掘調査・測量作業のための伐採作業後の状況(H 9)



第2主体部検出状況【南西から望む】



後円部北西側の墳丘崩落状況【北東から望む】



後円部北西側の墳丘基底部検出状況【北東から望む】  
原位置を保つ石材のほか、転落の状況が分かる石材を残した。



南東側くびれ部検出状況【東から望む】

後円部基底部と連なる前方部基底部列石と後円部二段目基底部と連なる前方部中段列石検出状況。後円部と接する前方部の盛り土を除去した状態の写真で、その内部には構築当時の状態で保存された後円部の石積み(二段築構造)が見える。



野田院古墳全景【航空写真・上が南東】

後円部周囲の黒色粘土部分は地山、その外側の列石は記録後除去した転落石材。



第2主体部解体作業風景【西から望む】

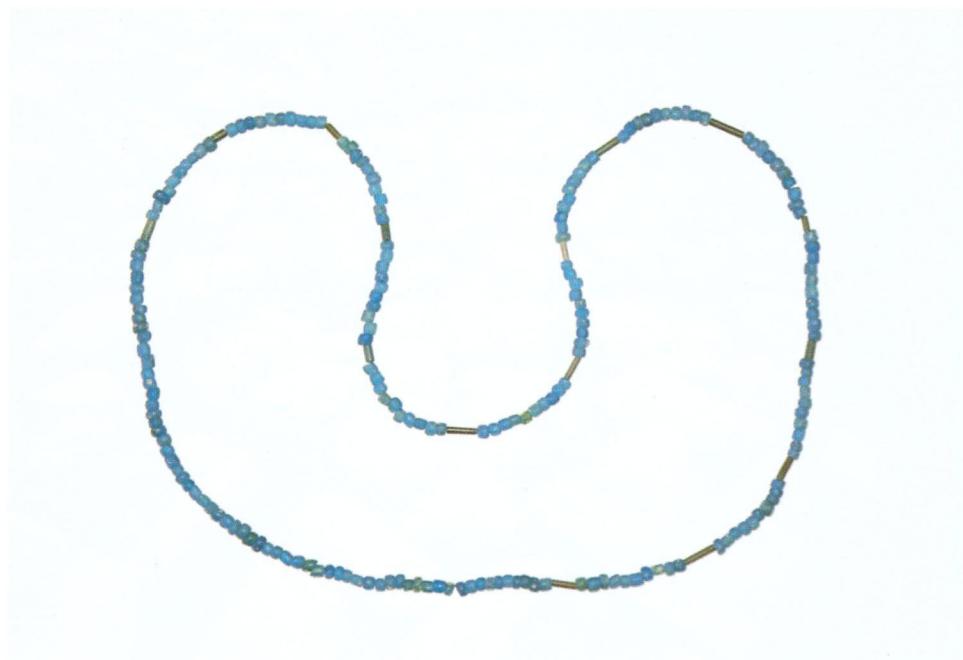


第1主体部(左)と第2主体部(右)の復元作業風景【西から望む】



第2主体部南壁中央部最下段解体作業の状況【北から望む】

石室内の粘土床除去後の状態で、石室壁面最下段石材と二段目の石材の間には粘土床と同様の粘土が敷設されており、この部分からもガラス玉が出土している。



第2主体部の粘土床内部から出土したガラス小玉と碧玉製極細管玉



後円部北西側基底部解体作業風景【南西から望む】



後円部北西側基底部解体作業後の状況【北東から望む】

傾斜部の最下段石材は地山の傾斜方向に逆らうように斜めに立て、連続して配置されている。この状態で解体作業を中断し記録作業を行った後に地盤補強作業を実施した。



後円部北西側一段目復元作業風景【北から望む】

オリジナル部分をできるだけ多く残し、その上に転落状況が判明している石材を戻し、その他の部位はくびれ部内部で確認された基底部の形状を参考に復元した。



後円部南側二段目復元作業時の積雪の状況【北東から望む】

冬季でも気候が温暖な香川県では積雪は珍しいが、野田院古墳を含め、これより高い場所では気温が低く凍土や積雪が頻繁に見られる。



前方部南東側面葺石検出状況【東から望む】

基底部と中段には柱状の石材が数段積まれているが全て外に倒れている。



前方部北西側面葺石復元後の状況【西から望む】

転倒している大きな柱状石材を矯正し、その他の小型の葺石は新たな盛り土で保護した。基底部と中段の柱状石材はくびれ部付近では後円部との連続性があるため露出させたが、その他の部位ではオリジナルは盛り土で保護し、その上に別な石材で列石を表現した。



復元が終わった野田院古墳全景【前方部(北東)から後円部を望む】  
くびれ部左側が陶板群による説明コーナー、後円部左側後方が展望台。



復元が終わった野田院古墳全景【西側の展望台から望む】  
墳丘は低いフェンスで取り囲み、その周囲を園路として整備した。

## 例　　言

1. 本書は、善通寺市教育委員会が国庫補助事業として実施した、史跡有岡古墳群（野田院古墳）保存修理事業及び、修理事業に伴い実施された発掘調査の報告書である。

2. 野田院古墳は善通寺市善通寺町字長谷2830-196に所在する。

3. 史跡有岡古墳群（野田院古墳）保存修理事業は平成9年度から平成14年度までの6ヶ年間継続して実施された。年度別の事業概要は以下のとおりである。

平成9年度　遺構確認調査・調査整備委員会

平成10年度　墳丘基底部及び第二主体部確認調査・調査整備委員会

平成11年度　実施設計・墳丘内部（くびれ部）遺構確認調査・調査整備委員会

平成12年度　主体部（2基）解体復元工事・調査整備委員会

平成13年度　後円部縁辺部解体復元工事・前方部復元工事・調査整備委員会

平成14年度　周辺（園路・説明板・柵・展望台等）整備工事・調査整備委員会

4. 本事業の実施組織は本文中(26頁)に掲載した。

5. 本書の編集作成は善通寺市教育委員会文化振興室室長補佐 笹川龍一が行い、下記の頁に関しては調査整備委員会の小林健一委員と内田昭人委員に玉稿を賜った。紙面を借りて厚くお礼申し上げます。

小林謙一（独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所埋蔵文化財センター）……………120～121頁

内田昭人（独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所修復技術部応用技術研究室長）……………122～123頁

6. 平成9年度から12年度までの調査に伴う発掘調査及び実測・写真撮影は笹川が、平成13年度から14年度までの修理事業に伴う発掘調査及び実測・写真撮影は笹川と善通寺市教育委員会文化振興室主事海邊博史が四国学院大学考古学研究部、関西大学文学部考古学研究室の協力を得て行った。

遺物の実測は香川県埋蔵文化財センター蔵本晋司氏・片桐孝浩氏、善通寺市教育委員会文化振興室主事渡邊淳子の協力を得た。

7. 本事業及び本書の作成にあたっては、次の方々・機関より多大なご指導・ご援助及び資料提供を得た。記して謝意を表します。（敬称略・順不同）

町田 章・本中 真・小林謙一・内田昭人・丹羽佑一・吉田重幸・谷口経孝・大塚初重

石野博信・太田文雄・魚島純一・香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター

高松市教育委員会・パリノ・サーヴェイ株式会社・四国電力株式会社

# 目 次

第一章 遺跡周辺の地理と歴史.....	1
第二章 整備事業に至る過程.....	8
第三章 野田院古墳の位置と環境・研究史 .....	10
第四章 発掘調査と保存整備事業 .....	12
① 平成9年度事業 トレンチによる墳丘の確認調査.....	12
第2主体部の確認.....	24
調査整備委員会.....	25
② 平成10年度事業 トレンチによる墳丘と周辺の遺構確認調査.....	27
後円部基底部の確認調査.....	32
主体部の調査.....	40
調査整備委員会.....	42
③ 平成11年度事業 くびれ部内部の調査.....	42
前方部列石の調査.....	47
整備方針の検討.....	48
④ 平成12年度事業 調査整備委員会.....	50
主体部の破損度調査と解体作業.....	50
主体部の復元作業.....	60
⑤ 平成13年度事業 調査整備委員会.....	60
後円部基底部の解体作業.....	60
後円部の復元作業.....	62
前方部の復元作業.....	69
⑥ 出土遺物.....	78
野田院古墳より出土した土器について.....	80
香川県埋蔵文化財センター 藏本晋司	
善通寺市野田院古墳から出土した遺物に付着した赤色顔料の蛍光X線分析について ...	90
徳島県立博物館 魚島純一	
野田院跡関連遺物.....	92
野田院跡の瓦.....	93
善通寺市教育委員会文化振興室 渡邊淳子	
有岡古墳群野田院古墳主体部粘土床の分析.....	98
パリノサーヴェイ株式会社	
⑦ 平成14年度事業 周辺整備事業 .....	102

## 第五章 まとめ

① 野田院古墳の考古学的評価	
独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 埋蔵文化財センター 情報資料室長 小林謙一.....	120
② 史跡保存整備事業としての古墳整備	
独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所 修復技術部 応用技術研究室長 内田昭人.....	122

## 挿 図 目 次

表表紙 保存整備が完了した野田院古墳全景  
裏表紙 後円部に復元された壺型埴輪（レプリカ）

- グラビア 1 有岡地区全景  
野田院古墳全景（側面）
- グラビア 2 野田院古墳全景（主軸方向から）  
第2主体部検出状況
- グラビア 3 後円部北西側の墳丘崩落状況  
後円部北西側の墳丘基底部検出状況
- グラビア 4 南東側くびれ部検出状況  
野田院古墳全景（航空写真）
- グラビア 5 第2主体部解体作業風景  
第1主体部と第2主体部の復元作業風景
- グラビア 6 第2主体部南壁中央部最下段解体作業の状況  
第2主体部の粘土床内部から出土したガラス小玉と碧玉製極細管玉
- グラビア 7 後円部北西側基底部解体作業風景  
後円部北西側基底部解体作業後の状況
- グラビア 8 後円部北西側一段目復元作業風景  
後円部南側二段目復元作業時の積雪の状況
- グラビア 9 前方部南東側面葺石検出状況  
前方部北西側面葺石復元後の状況
- グラビア 10 復元が終わった野田院古墳全景（前方部から）  
復元が終わった野田院古墳全景（展望台から）

第1図	善通寺市遠景	1
第2図	調査地と周辺の主要遺跡	3
第3図	王墓山古墳横穴式石室検出状況	8
第4図	整備後の王墓山古墳	8
第5図	発掘調査中の宮が尾古墳	8
第6図	整備後の宮が尾古墳	9
第7図	大麻山北部遠景	10
第8図	野田院古墳全景	11
第9図	半壊した竪穴式石室	11
第10図	後円部の状況	11
第11図	後円部の伐採作業風景	12
第12図	野田院古墳全景	12
第13図	野田院古墳地形測量図	13
第14図	野田院古墳全景	14
第15図	トレンチ配置図（H9）	14

第16図 第1・2トレンチ実測図	16
第17図 第1・2トレンチ検出状況	17
第18図 第3トレンチ検出状況	18
第19図 第4トレンチ検出状況	18
第20図 第5トレンチ検出状況	18
第21図 第3・4トレンチ実測図	19
第22図 第5・6トレンチ実測図	20
第23図 第6トレンチ検出状況	21
第24図 第7トレンチ検出状況	21
第25図 第8トレンチ検出状況	21
第26図 第7・8トレンチ実測図	22
第27図 第9トレンチ検出状況	23
第28図 第9・10トレンチ実測図	23
第29図 第10トレンチ検出状況	24
第30図 第2主体部検出状況	24
第31図 第2主体部検出状況	24
第32図 第2主体部位置図	25
第33図 調査整備委員会開催風景	26
第34図 トレンチ配置図(H10)	27
第35図 第11トレンチ検出状況	27
第36図 第11トレンチ北西端の後円部基底部検出状況	28
第37図 第12トレンチ検出状況	28
第38図 第13・14トレンチ検出状況	28
第39図 第13・14トレンチ実測図	29
第39図 第13トレンチ列石検出状況	29
第39図 第14トレンチ列石検出状況	29
第40図 第15トレンチ検出状況	30
第41図 第16トレンチ葺石転落状況	30
第42図 第16トレンチ検出状況	30
第43図 第16トレンチ葺石検出状況	30
第44図 第16トレンチ完掘状況	30
第45図 第16トレンチ実測図	31
第46図 後円部基底部発掘作業風景	32
第47図 後円部基底部土師器出土状況	32
第48図 発掘調査前の後円部周囲の状況	33
第49図 後円部基底部の検出状況	34
第50図 後円部北西側基底部検出状況平面図	35・36
第51図 後円部南東側基底部検出状況平面図	37・38
第52図 南東側くびれ部検出状況	39
第53図 前方部内部の後円部基底部検出状況	39
第54図 ラジコンヘリによる撮影作業風景	39
第55図 航空写真・野田院古墳と背景	39

第56図	航空写真・野田院古墳全景	39
第57図	第2主体部検出状況	41
第58図	後円部基底部（1～2段目）検出状況	43
第59図	第2主体部側面に見える石材の並び	43
第60図	くびれ部付近での後円部基底部と前方部葺石検出状況実測図	44
第61図	後円部基底部断面図と基底部側面実測図	45
第62図	前方部内調査区の土層	46
第62図	前方部内調査区の土層実測図	46
第63図	第17トレンチ検出状況	47
第64図	第17トレンチ検出状況	47
第64図	第17トレンチ実測図	47
第65図	展望台位置の検討作業風景	48
第66図	仮設足場から見たキャンプ場	48
第67図	B地点からの展望	49
第69図	A地点から見た墳丘	49
第68図	撮影地点位置図	49
第70図	解体作業視察風景	50
第71図	主体部解体復元作業風景	51
第72図	第1主体部実測図（昭和41年調査時）	52
第73図	第1主体部実測図（復元後）	53
第74図	第2主体部実測図（検出状況）	54
第75図	第2主体部実測図（復元後）	55
第76図	第1・2主体部開口部石材実測図（復元後）	56
第77図	墳丘内の乳灰色粘土の堆積	57
第78図	石室外粘土中のガラス玉出土状況	57
第79図	碎石の基礎部と最下段石材間の粘土	57
第80図	第1主体部壁面石材間の粘土確認範囲位置図	58
第81図	第2主体部壁面石材間の粘土確認範囲位置図	59
第82図	後円部基底部解体修理範囲位置図	61
第83図	後円部解体作業記録写真	63
第84図	後円部西側～北側断面図	64
第85図	後円部西側～北側最下層石材検出状況実測図	65・66
第86図	後円部西側～北側最下層石材角度説明図	67・68
第87図	蓋石含浸準備作業風景	69
第88図	蓋石含浸作業風景	69
第89図	整備前と整備後の墳丘断面図	69
第90図	後円部復元作業記録写真	70
第91図	後円部一段目側面実測図	71・72
第92図	後円部二段目側面実測図①	73・74
第93図	後円部二段目側面実測図②	75・76
第94図	前方部復元作業記録写真及び竣工状況写真	77
第95図	第2主体部粘土床内から出土した玉類	78

第96図 第2主体部出土鉄剣	79
第97図 墳丘及び周辺部出土土師器実測図①	82
第98図 墳丘及び周辺部出土土師器実測図②	83
第99図 墳丘及び周辺部出土土師器実測図③	84
第100図 実測土師器出土位置図	84
第101図 墳丘及び周辺部出土土師器写真①	86
第102図 墳丘及び周辺部出土土師器写真②	87
第103図 墳丘及び周辺部出土土師器・須恵器写真③	88
第104図 野田院関連遺物実測図	92
第105図 平瓦の製作工程	94
第106図 野田院古墳採取丸瓦	95
第107図 野田院古墳採取平瓦	95
第108～111図 野田院古墳模型	103
第112図 竣工施設配置図（全体図）	104
第113図 展望デッキ詳細図	105
第114図 施設詳細図①（フェンス・墳丘断面模型）	106
第115図 施設詳細図②（解説板・案内板・土器レプリカ）	107
第116図 墳丘周辺施設設置状況	108
第117図 解説板・案内板位置図及び墳丘断面縮小模型側面図	109
第118図 説明板・案内板原稿①	110
第119図 説明板・案内板原稿②	111
第120図 説明板・案内板原稿③	112
第121図 説明板・案内板原稿④	113
第122図 説明板・案内板原稿⑤	114
第123図 説明板・案内板原稿⑥	115
第124図 説明板・案内板原稿⑦	116
第125図 説明板・案内板原稿⑬	117
第126図 説明板・案内板原稿⑭	118
第127図 説明板・案内板原稿⑮	119

# 第一章 遺跡周辺の地理と歴史

善通寺市は香川県西部の内陸部に位置し、東は丸亀市、西は三豊郡高瀬町・三野町、南は仲多度郡琴平町、北は仲多度郡多度津町と境を接している。

真言宗開祖の弘法大師（空海）が誕生した土地として有名なこの田園都市の中心部には弘法大師を輩出した佐伯氏の氏寺として建立された善通寺伽藍があり門前町として発達している。

善通寺市周辺に広がる丸亀平野は、土器川や金倉川・弘田川の沖積によって形成された香川県下最大の沖積平野で、これらの河川による扇状地・氾濫原・小三角州などから形成されており、南から北に下るゆるやかな傾斜になっているため、たいていの場所から瀬戸内海や対岸の岡山を望むことができる。この河成沖積層の土壤は、下層土が灰褐色のマンガン結核を含む黄褐色砂質土層、表層70~80cmが強粘土質砂礫層で構成されており、通常弥生時代以後の遺構はこの下層上面に遺存している。この黄褐色砂質土層中には希に縄文土器片が含まれていることが知られていたが、近年実施された四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査などによって、この土層は縄文時代後期から晩期にかけて堆積したものであることが確認されている。

また、善通寺市の北には讃岐の中世山城跡を代表する天霧城跡が山頂部に所在する天霧山、西から東にかけては、火上山・中山・我拝師山・筆の山・香色山が麓をつらねて並んでおり、五岳と呼ばれるこれらの山塊は、あたかも五枚の屏風をたてかけたようにそびえていることから、この山麓の地は屏風ヶ浦とも呼ばれ、当地の人々に親しまれ、古くから信仰の対象であったことが伺える。その南には、中山に連なる東部山・有岡の里を経て大麻山がそびえており、平地中には鶴が峰・磨臼山・如意山・鉢伏山・甲山などの小丘が散在している。

瀬戸内海の南岸に位置し気候と風土に恵まれた丸亀平野は、かなり古くから人間の文化が開けた土地であり、丸亀市の中ノ池遺跡・善通寺市の五条遺跡・善通寺市から仲多度郡にかけて広がる三井遺跡など、弥生時代前期から中期にいたる同時代の遺跡群が知られている。中ノ池遺跡では環濠と想定される三重の大溝が検出され、弥生時代前期の古段階の特徴をもつ弥生土器を中心に、一部中期的様相を呈するものまで出土している。三井・五条遺跡では、遺構・遺跡の範囲などについては現在も明



第1図 善通寺市遠景

背後の山は左端から大麻山・香色山・筆ノ山・我拝師山(その手前の小丘が甲山)・中山・火上山

らかにできていないが、出土した土器片については、畿内第Ⅰ様式の中段階から新段階に相当することが確認されている。

また、これらの遺跡群は平野部の微高地上に立地すると考えられており、現在の海岸線からの距離は2～3kmを計るが、当時の復元海岸線が現在よりやや内陸部にあったと推定すれば、三井・中ノ池遺跡などは海岸付近に形成された集落であることがわかる。そして、更に永井遺跡では四国横断自動車道路建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査によってこれらの遺構が遺存する黄褐色砂質土層とこの下の洪積層の間に、縄文時代後期から晩期の生活痕が確認されている。また、吉原町ではやはり横断道の調査によって旧石器も確認されており、現在のところ善通寺市の古代文化は約2～3万年前まで遡ることができる。

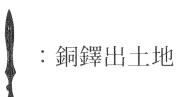
善通寺市街地の北一帯には香川県を代表する弥生時代の中枢的な集落遺跡がある。西は筆の山の山裾から、東は四国農業試験場の敷地にまで及んでおり、ここがもと旧陸軍の練兵場用地であったことから旧練兵場遺跡と呼ばれている。

昭和30年頃の四国農業試験場の用地整備工事に伴って、弥生時代前期から後期にかけての小児壺棺十数点・多数の土器、石器類が出土したことや、県道の整備工事の際に国立病院のあたりから弥生土器に加えて須恵器や小玉などが出土したことなどから、遺跡は弥生時代のみならず、古墳時代にまで及んでいることが知られていた。

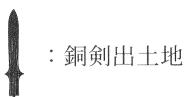
旧練兵場遺跡はこのように広い範囲に及び中枢的な存在である可能性が強いばかりでなく、弥生時代前期から後期、古墳時代にかけての連続性が考えられる県下でも例のない存在であると考えられている。ただ、最近の調査によってこの旧練兵場遺跡は幾つかの川道によって分断されていることが解つており、この周辺の関連遺跡を含めて旧練兵場遺跡群としてとらえた方が良いと思われる。

この遺跡群ではこれまでに数多くの発掘調査が実施されている。以下、主な調査を順に紹介する。総本山善通寺の西に流れる弘田川沿いで昭和52年に調査が実施された善通寺西遺跡では、弥生時代後期から古墳時代にかけての用水路が検出され、多数の小型丸底壺・船の櫂や柱材などが出土しており、生活基盤である水田域の拡大が行われたことや古い溝の廃絶に伴う祭祀が行われたことが確認されている。続いて、昭和58年には遺跡群の東端部に所在する白鳳時代建立と考えられる善通寺の前寺・仲村廃寺（伝導寺跡）の発掘調査が実施され、寺域の北端と、更にその下層では弥生時代中期から古墳

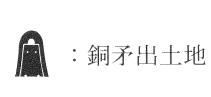
- |             |               |                |              |              |
|-------------|---------------|----------------|--------------|--------------|
| 1. 三井遺跡     | 9. 甲山遺跡       | 14. 四国学院大学構内遺跡 | 22. 鶴ヶ峰4号墳   | 30. 大麻山経塚    |
| 2. 五条遺跡     | 10. 弘田川西岸遺跡   | 15. 生野本町遺跡     | 23. 鶴ヶ峰山頂古墳  | 31. 大麻山椀貸塚   |
| 3. 稲木・石川遺跡  | 11. 善通寺西遺跡    | 16. 香色山経塚群     | 24. 磨臼山古墳    | 32. 丸山1号墳    |
| 4. 永井遺跡     | 12. 旧練兵場遺跡群   | 17. 大塚池古墳      | 25. 磨臼山祭祀遺跡  | 33. 丸山2号墳    |
| 5. 中村遺跡     | ①彼ノ宗遺跡        | 18. 北原古墳       | 26. 宮か尾1・2号墳 | 34. きつちょ塚    |
| 6. 乾 遺跡     | ②仙遊遺跡         | 19. 菊塚古墳       | 27. 御館神社古墳   | 35. 大麻山箱式石棺群 |
| 7. 九頭神遺跡    | ③仲村廃寺(白鳳)     | 20. 王墓山古墳      | 28. 瓦谷1号墳    | 36. 野田院古墳    |
| 8. 吉田八幡神社古墳 | 13. 善通寺伽藍(奈良) | 21. 丸山古墳       | 29. 南光古墳群    |              |



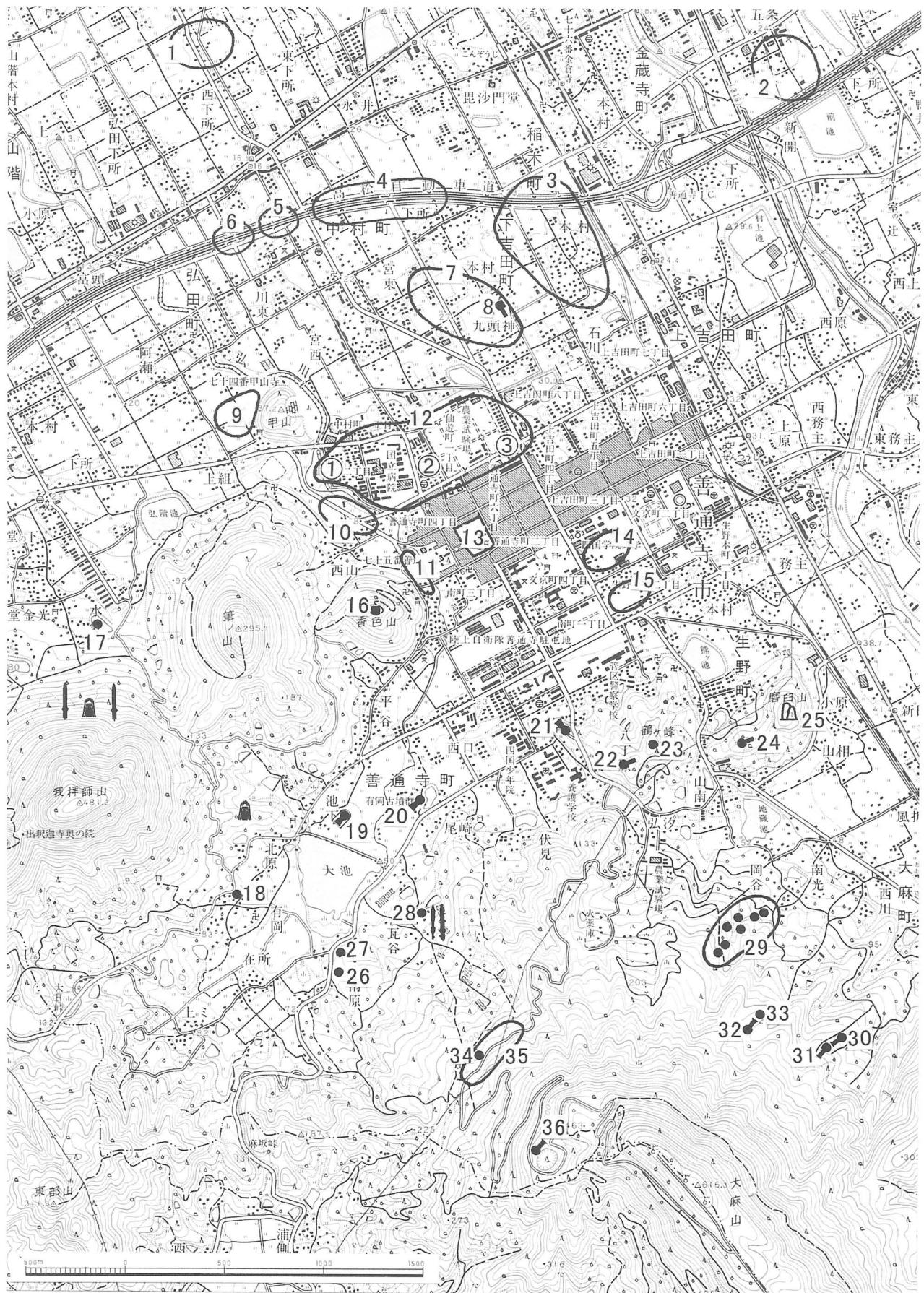
：銅鐸出土地



：銅劍出土地



：銅矛出土地



第2図 調査地と周辺の主要遺跡

時代にかけての遺構が検出された。

昭和59年には善通寺西遺跡から弘田川沿いの600m程下流に所在する彼ノ宗遺跡の発掘調査が実施されたが、ここでは約1,500m<sup>2</sup>の調査区から弥生時代中期から後期にかけての40棟以上の竪穴住居と小児壺棺墓15基、無数の柱穴と土坑群、古墳時代の掘建柱建物跡2棟 とそれに伴う水路、二重の周溝をもつ多角形墳の基底部などが夥しい生活の痕跡が確認されている。特に弥生時代終末期の竪穴住居からはその廃絶時の祭祀に用いられたと考えられる仿製内行花文鏡片の懸垂鏡や銅鏡・多数の玉類が出土しており、この地区における弥生時代終末期の動向を推測する上で注目されている。

昭和60年には彼ノ宗遺跡から東に約500m程の仙遊遺跡で弥生時代後期の箱式石棺と小児壺棺墓3基が発見されたが、この箱式石棺の石材には入れ墨を施した人面や鳥の絵の他、直弧文状の文様が一面に線刻されていたことから全国的な話題となった。

そして、その後もこの周辺では新たに甲山遺跡や弘田川西岸遺跡などが確認されたほか、旧練兵場遺跡の中核と考えられる国立病院や四国農業試験場の敷地では開発に伴う発掘調査が頻繁に行われており、これらの資料の蓄積から、旧練兵場遺跡を中心とした丸亀平野の動向が明らかにされつつある。

市街地から北方に広がる平野部にも数多くの集落遺跡が散在していたことが知られている。まず旧練兵場遺跡から北方500mあたりには九頭神遺跡があり、ここでは昭和62年に都市計画道路改良工事に伴う発掘調査が実施され、弥生時代後期頃の竪穴住居や小児壺棺墓・箱式石棺墓等が確認されている。九頭神遺跡から東方には弥生時代から古墳時代にかけての遺物が多量に散布することで知られる稻木・石川遺跡が広がるが、石川地区は未調査のため詳細は不明である。稻木地区では、四国横断自動車道路建設に伴う調査が昭和58年5月から昭和60年3月にかけて、また県道善通寺白方線改良工事に伴う調査が昭和61年度と昭和63年度の二回に分けて実施されており、やはり弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居群や墓地、中世の建物跡群などが確認されている。

四国横断自動車道路の建設に伴う調査ではこの他にも中村遺跡・遺跡乾遺跡など多数の遺跡が確認されている。

旧地形をみると、これらの集落遺跡群はいずれも旧河道と旧河道の間に形成された微高地に営まれたものであり、これまでの調査結果から大半の遺跡はいずれも同時期に併存したものであることもわかる。従って弥生時代頃の善通寺周辺部には“大集落”というよりはむしろ平野部一帯に“小国”レベルの規模の町が存在していたものと想像できる。

また、善通寺市内からは与北山の陣山遺跡で平形銅劍3口、大麻山北麓の瓦谷遺跡で平形銅劍2口・細形銅劍5口・中細形銅鉢1口の計8口、我拝師山遺跡では計3力所から平形銅劍5口・銅鐸1口、北原シンネバエ遺跡で銅鐸1口など、青銅器が数多く出土しており、旧練兵場遺跡群や周辺部の遺跡群を本拠とした集団との関連も注目される。

やがて弥生時代に開始された稻作文化は完成期を迎え、丸亀平野という肥沃な生産基盤を背景に地域を代表する豪族が登場する。豪族は拠点集落（現在の市街地）の南西部の「有岡」と呼ばれる丘陵部を中心に数多くの墳墓を築くようになる。

市内の古墳は確認されているだけでも400基を超えており、中でも香色山・筆ノ山・我拝師山で北部を、大麻山で南部を限られた弘田川流域の有岡地区は前方後円墳が集中する地域として有名であり、古墳時代を迎えるこの地の勢力は更に発展を続けていったことがわかる。

旧練兵場遺跡では弥生時代の集落遺構群と重複して古墳時代の集落遺構群も確認されている。幾重にも重なり、発掘調査の際には遺構の複合状況を把握することが困難と思われる状況が頻繁にみられるほどである。このように弥生から古墳時代にかけての集落域は市街地から北方と東方に広がりを見せ、市街地南西部の丘陵部（有岡周辺部）に青銅器が多く出土し、数多くの古墳が築かれていることからこの地域が古くから聖域視されていたものと考えられる。

古段階の古墳としては、大麻山山麓中でも比較的高所を中心に大麻山椀貸塚、大麻山経塚、御忌林古墳、大窪経塚古墳、丸山1号・2号墳など数多くの積石塚が築かれているが、御忌林と丸山2号墳以外は全て前方後円墳であり、積石塚古墳分布範囲の最西限に位置している点でも注目できる。

中でも野田院古墳は大麻山北西麓（標高405m）のテラス状平坦部という全国的にも有数の高所に立地する丸龜平野最古段階の前方後円墳で、前方部は盛り土、後円部は積石で構築されている。

野田院古墳より下方の中腹には弥生時代後期末頃とみられる30基以上の箱式石棺墓群が確認されている。この中には積石を伴うものや仿製内行花文鏡の副葬が確認されているものもあり、野田院古墳との関連が注目される。

有岡地区の平地部分には、前期から後期にかけての多数の前方後円墳が直線的に並んで築かれている。北東から南西方向に順に生野罐子塚古墳（消滅）・磨臼山古墳・鶴が峰2号墳（消滅）・鶴が峰4号墳・丸山古墳・王墓山古墳・菊塚古墳が知られており、その状況から同一系譜上の首長墓群と考えられているが、中でもその中央の小丘陵上に築かれた王墓山古墳は一際目を引く存在である。

古墳時代後期末になると大麻山山麓部の至る所に群集墳が出現する。現存する群集墳の中には線刻画で装飾された横穴式石室が計8基確認されており、それらが共通モチーフを有している点は大変興味深い。宮が尾古墳もそのひとつである。線刻画ではそのモチーフの正体を把握しにくいものが多いが、宮が尾古墳には、周辺の装飾古墳と共にモチーフの他、人物群や船、騎馬人物が具象的に描かれており、装飾古墳を考える上で極めて貴重な存在と考えられている。

この頃の丸龜平野は金倉川の東が那珂郡、西が多度郡と呼ばれており、多度郡には佐伯直一族が勢力をもっていたため有岡一帯の前方後円墳群についても佐伯の一代系譜の墓とする考えが有力である。

やがて仏教の伝来に伴い、白鳳期には佐伯の氏寺である伝導寺（仲村廃寺）が旧練兵場遺跡の一角に建立されている。平成14年に四国学院大学構内で図書館建設に伴う発掘調査を実施した際、古墳時代後期の倉庫を伴う竪穴住居群や7世紀代の溝が検出されたが、その際伝導寺（仲村廃寺）で確認されているものと同じ瓦が数点出土した。この南に隣接する生野本町遺跡では7世紀後半から8世紀前半頃の集落が調査されているが、ここでは溝を伴う大型柱穴群（10間以上）が確認されており、時期的に地方行政に関わる施設が存在した可能性が考えられている。

生野本町遺跡と四国学院大学構内遺跡は同一微高地上にあり、成立後短期間で廃絶した特異な遺跡

である一方、この地の有力豪族佐伯氏が大きく関わっている可能性も考えられる。

さて、伝導寺（仲村廃寺）は奈良時代には消滅してしまう。奈良時代末、宝亀五年（774）この地の有力豪族であった佐伯氏に弘法大師が誕生するが、平安初期、大同二年（807）に唐から帰朝した大師が、長安の青竜寺を模して今の伽藍の場所に真言宗最初の根本道場として善通寺を建立した記録が残る。伝導寺（仲村廃寺）と善通寺伽藍は500m程しか離れておらず、この時に氏寺の移転が行われたものと考えられているが、移転の原因などは不明である。

さて善通寺には創建当時、四町四方の境内に金堂や大塔、講堂、法華堂、西塔、護摩堂の他、四十九の僧房があったといわれているが、平安時代末頃から鎌倉時代、そして南北朝時代にかけては、社会環境の大きな変化に伴い幾度も荒廃の危機に曝された。これを反映するように、善通寺の西側に隣接する香色山山頂では平安時代末頃の経塚群が確認されている。末法思想を背景として、この地を活動の基盤とした佐伯や善通寺の僧侶達が造り上げたものであるが、中には子孫のために経筒などの埋納場所を事前に確保しておいたとみられる上下二段構造の経塚（香色山1号経塚）が1997年夏に確認され注目を集めた。

善通寺は戦国時代、永禄元年（1558）には香川・三好両軍の戦火により焼失してしまう。その復興が始まるのは、やがて江戸時代に徳川幕府が封建制度を確立してからのことであるが、四国八十八カ所巡礼や金毘羅参りが全国的な信仰行事となるのはこの頃からであり、八十八カ所のうち五カ所がある善通寺市は善通寺を中心に門前町として活気を取り戻す。

やがて明治29年には第十一師団が設置されたことにより都市化する。門前町に軍都としての性格を帯びるようになったが、このため道路や鉄道が整備された。この頃建設された洋風デザインの建造物群は市街地に今も多数残され、独特の景観を呈している。

これにより善通寺町として都市化が始まり、昭和29年3月31日に竜川村・与北村・筆岡村・吉原村との合併により市制が施行され、善通寺市が誕生した。

## 参考文献

『善通寺市の古代文化』	矢原高幸・善通寺市	1973年11月
『善通寺市史・第一巻』	善通寺市	1977年7月
『中の池遺跡発掘調査報告書』	丸亀市教育委員会	1982年3月
『香川叢書・考古篇』	香川県教育委員会	1983年3月
『王墓山古墳調査概報』	善通寺市教育委員会	1983年3月
『五条遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1983年11月
『香川の前期古墳』	日本考古学協会昭和58年度大会香川県実行委員会	1983年11月
『仲村廃寺発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1984年3月
『彼ノ宗遺跡』	善通寺市教育委員会	1985年3月
『仙遊遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1986年3月

『九頭神遺跡発掘調査報告書』	善通寺市教育委員会	1988年3月
『稻木遺跡』	稻木遺跡発掘調査団	1989年3月
『仲村廃寺』	善通寺市教育委員会	1989年3月
『史跡有岡古墳群（王墓山古墳）保存整備事業報告書』	善通寺市教育委員会	1992年3月
『生野本町遺跡発掘調査報告書』	香川県教育委員会	1993年2月
『御館神社古墳発掘調査報告』	善通寺市教育委員会	1993年3月
～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1～		
『青龍古墳調査報告書』	善通寺市教育委員会	1994年3月
～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2～		
『旧練兵場遺跡』	香川県教育委員会	1994年3月
『九頭神遺跡・宮が尾古墳隣接地調査報告書』	善通寺市教育委員会	1995年3月
～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3～		
『香色山山頂遺跡群調査報告書』	善通寺市教育委員会	1996年3月
～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4～		
『弘田川西岸遺跡』	(財)香川県埋蔵文化財調査センター	1996年3月
『史跡有岡古墳群（宮が尾古墳）保存整備事業報告書』	善通寺市教育委員会	1997年3月
『旧練兵場遺跡Ⅱ』	香川県教育委員会	1997年3月
『旧練兵場遺跡Ⅲ』	香川県教育委員会	1998年3月
『山南遺跡・彼ノ宗遺跡調査報告書』	善通寺市教育委員会	1999年3月
～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書5～		
『鉢伏山北東麓遺跡群・菊塚古墳調査報告書』	善通寺市教育委員会	2001年3月
～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6～		
『旧練兵場遺跡』	善通寺市・(財)元興寺文化財研究所	2001年3月
～市営西仙遊町住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～		
『旧練兵場遺跡・四国学院大学構内遺跡・菊塚古墳』	善通寺市教育委員会	2002年3月
～善通寺市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6～		
『旧練兵場遺跡』	善通寺市・(財)元興寺文化財研究所	2002年3月
～特別擁護老人ホーム仙遊荘建替に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書～		
『角川日本地名大辞典・37香川県』	株式会社角川書店	1985年10月

## 第二章 整備事業に至る過程

善通寺市では昭和57年度に王墓山古墳で緊急の発掘調査を実施した。これは私有地の宅地造成に伴うもので、王墓山古墳が「史蹟名勝天然記念物調査報告」(昭和8年発行)にも紹介されている前方後円墳であったことから現状での保存を要望したが、計画の変更は困難ということであったため緊急の発掘調査を実施し、その結果を待って再度協議することとなった。

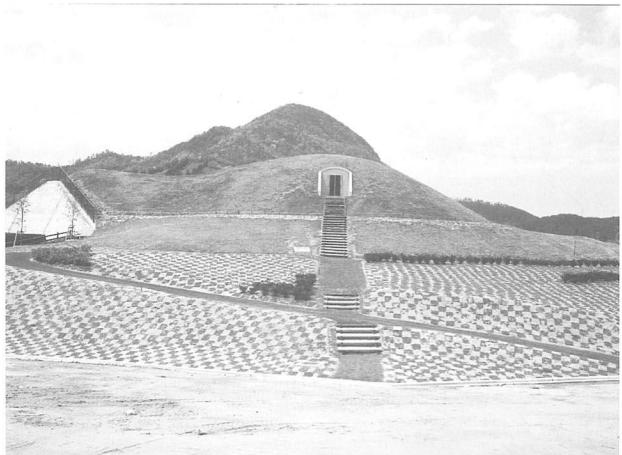
調査の結果、県下では最古級の横穴式石室が検出され、玄室では石屋形が確認された。石屋形は九州肥後地方を中心とした分布が見られるが、四国では始めての発見となった。しかも金銅製冠帽をはじめ夥しい数の金銅製馬具や武具・装飾品・須恵器が出土したこと、本墳の文化財としての価値が高く評価された。

そこで所有者と再度協議を行ったところ、この発見が大きく報道されたこともあり、史跡指定(昭和59年11月29日)を経た公有地化までの手続きは順調に推移した。指定の際には王墓山古墳のみならず、この地を統治した歴代の豪族の首長墓群と考えられる他の4基の前方後円墳(野田院古墳・磨臼山古墳・鶴が峰4号墳・丸山古墳)と1基の装飾古墳(宮が尾古墳)を含めて「有岡古墳群」としての指定となった。

指定の契機となった王墓山古墳は横穴式石室全体が発掘調査によって露出した状態で数年間置かれていた。また石室は全ての天井石を失っていたため極めて不安定な状態であった。そこで国及び県の補助を得て保存整備事業を実施することとなった。事業には昭和61年度から6年間を費やし、復元の根拠を得るために発掘調査と並行して保存整備工事を実施した。発掘調査や整備事業の計画策定及びその実施に際しては、事業を円滑に進めるため考古学や造園など各方面の専門家による調査整備委員会を設置し指導を受けながら事業を進め



第3図 王墓山古墳横穴式石室検出状況



第4図 整備後の王墓山古墳



第5図 発掘調査中の宮が尾古墳

た。

王墓山古墳は県下最古級の横穴式石室に石屋形を持つ特殊な構造であり、付近は勿論のこと県内にも類例が無く、失われた部分をいかに復元するのかが大きな課題であったが、残された壁面の形状や転落していた天井石、墳丘の形状などを参考に復元作業を実施した。

平成4年度からは王墓山古墳に引き続き、線刻壁画で装飾された宮が尾古墳において保存整備事業を実施した。宮が尾古墳の墳丘は完全に地中に埋没しており、梅雨時期など降水量の多い時期には石室が水没するため壁画の損傷が懸念されていた。そこで発掘調査を実施し、地中に埋没した墳丘の規模形状を確認した後に、公有地化を経て保存整備事業を実施した。

保存整備事業に伴う発掘調査によって史跡指定範囲内からもう1基の円墳が検出されたが、調査の結果、新たに確認された円墳は宮が尾古墳と同時構築であることが確認できた。これらの結果を参考に周辺地形を旧状に復し、石室の修理を実施したところ、石室内への雨水等の浸入は無くなった。

宮が尾古墳では2基の古墳を復元整備したほか、敷地内に石室の原寸大復元模型や有岡古墳群全域の立体模型を設置し、平成8年に事業を完了した。宮が尾古墳保存整備事業の最終年度には調査整備委員会で次に保存修理が必要と考えられる古墳についての検討が行なわれ、大麻山山頂付近に所在する野田院古墳が候補に挙げられた。

野田院古墳は香川県を中心に瀬戸内海沿岸部に分布する積石塚のひとつであり、県下では分布の西限、比高差でみれば全国的に最も高い場所に構築された発生期の前方後円墳であることが知られていた。野田院古墳は県下の他の積石塚と同様に比較的高い山の尾根上に立地するため人が入る機会は少なかつたが、昭和48年5月に古墳の隣接地が市営キャンプ場として整備された。この頃大麻山山頂にはテレビ中継等のアンテナ施設群が建設され、展望台公園などの整備に伴い登山道も舗装整備されたため、ここを訪れる人は著しく増加し墳丘の石材の崩落速度が加速する結果となった。また山中であるため樹木等の繁茂に伴い根による墳丘の破壊も懸念されていた。

そこでこの積石の前方後円墳、野田院古墳の保存整備事業を平成9年度から着手することになった。積石塚の本格的な発掘調査や解体修理は県内は勿論のこと国内でも例が無く、その手法等に関して不安な要素は多く残されたが、墳丘全体の本来の形状等を確認することを目的とした発掘調査と詳細な地形の測量調査から作業を開始した。



第6図 整備後の宮が尾古墳

### 第三章 野田院古墳の位置と環境・研究史

野田院古墳が立地する大麻山は讃岐山脈を除けば、県下の平野部において最も高い独立丘陵（標高616m）で、四国の百名山にも数えられている。

大麻山は南北に長く山頂部に平坦面を残す開析溶岩台地で、側面からはその名のとおり巨象の姿に見える。その背にあたる部分には幾つかの高まりがあり、見る場所により最高部は異なって見える。それぞれの高まりには、北から「大麻山」・「象頭山」・「琴平山」の名があるため地元でも地域や人により呼び名が変わり、地元住民間でもその区別は曖昧になっている。

「象頭山」と呼ばれるのはこの山の南東部で琴平町に属しており、名勝・天然記念物の指定を受けている。また、象頭山一帯は山腹にある金刀比羅宮の神域とされ県下有数の動植物の宝庫であり、昭和25年に瀬戸内海国立公園の一部に指定されている。「琴平山」は「象頭山」の別称とされるが、地理院地図には両方の名が記載されている。

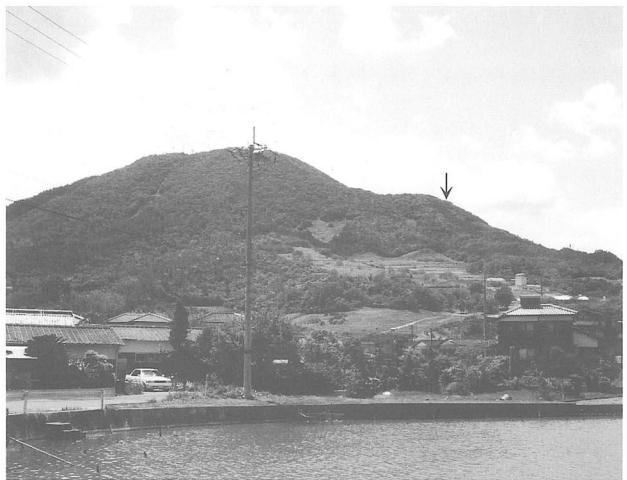
「大麻山」は善通寺市域では南端、仲多度郡琴平町と三豊郡高瀬町の境にあり、善通寺市側では大抵この名で呼ばれている。（第2図参照）

大麻山は地質学的には領家花崗岩上に凝灰岩類を挟みその上に讃岐岩質安山岩が乗っているため、山頂付近には讃岐岩質安山岩の露頭地が多く急峻な崖状の地形が多く見られる。この讃岐岩質安山岩は硬く板状・柱状の節理により板状・方状・棒状の形状を呈する堅緻な石材であるため、古墳の石室や積石塚の材料としては理想的な素材である。

大麻山北端の標高約400m付近には直径約100mの広い円形の平坦地がある。その中央部はやや窪んでおり、古い文献には火口跡との表現も見えるが、近年では地滑り地形との見方がある。この円形窪地の北西側縁辺部は大麻山山頂部から西方向に派生する幅の狭い尾根があり、その先端は急勾配となっている。野田院古墳はこの尾根の先端に造られている。

この窪地の奥側（北東部）は野田院跡と呼ばれ、瓦や銅印の出土によって古代寺院があつたことが知られており、古墳の名もその寺名に由来する。野田院古墳は讃岐宮司矢原高幸（故人）によって「平地文化と絶縁された場所に造られている・墳丘の周囲に周帶状の平坦地形を伴う・後円部は積み石であるが前方部は盛土である・黄金伝説に伴う石室盗掘と思われる窪みが2箇所で確認できる」となどが昭和48年に報告されている。また、弥生土器の散布が確認された記録があり、高地性集落である可能性も伝えられてる。

この窪地周辺は野田院廃絶後は人が入ることは殆ど無かったようであるが、戦後には入植者が住居



第7図 大麻山北部遠景(北から)  
矢印が野田院古墳

を設けこの窪地を開墾している。その後再び無人となり、昭和48年に善通寺市が所有者から土地を無償で借り受け窪地の一部を造成しキャンプ場として整備し利用を開始した。この頃大麻山山頂にテレビ局の中継塔が多数建設され、これに伴い登山道が舗装整備されたため、キャンプ場の利便性が増し登山者も増えた。

善通寺市では古墳の見学者やキャンプ場利用者に対応するため、昭和53年度の「史跡めぐりハイキングコース」整備の際に標柱や説明板を設置している。

その後の調査としては、昭和41年6月から7月にかけて香川県教育委員会が「香川県重要遺跡確認調査」の一環として実施した際の報告がある。

調査は盗掘され崩壊状態にあった竪穴式石室と墳丘の測量に限定したものであったが、墳丘を含め周辺の草や低木を除去して丹念に行なわれ、前方部は盛り土でその表面に石が葺かれていること、くびれ部から撥形に開く部分まで上下二段の列石状石組みの存在、数箇所に盗掘の跡と思われる窪みがあることなどが報告されている。また、後円部の石積みは崩落が著しく段築構造は確認できないが、盗掘により半壊した竪穴式石室が後円部中央から北寄りに残されていることから、もう一基の石室が存在する可能性や、石室付近の盗掘坑から土師器の破片が出土したことを報告している。それ以降は善通寺市教育委員会による管理作業程度のみで、調査等は行なわれたことが無かった。

さて、これ以上の崩落を防ぐため平成9年度から野田院古墳の復元整備事業に着手することとなつたが、この時期の積石塚の本格的な発掘調査や解体修理は国内でも例が無く、その手法等に関して不安な要素は多く残された。そこで墳丘全体の本来の形状等を確認することが可能か否かを判断する目的での詳細な地形の測量調査や部分的な発掘調査に着手した。



第8図 野田院古墳全景(南東から)  
伐採前夏季の状況(S60)



第9図 半壊した竪穴式石室(昭和41年調査時)  
「香川の前期古墳」より転載



第10図 後円部の状況(南西から)  
定期的な管理伐採時に撮影(S60)

## 第四章 発掘調査と保存整備事業

積石塚の保存整備事業で最も重要な点は、崩れ落ちた石材の山から復元の根拠にできるような構築当時の状態を示す部位を確認することである。

3世紀末頃に石材のみを用いて積み上げられた構造物が長い時間をかけて徐々に崩壊を続け、今は凸レンズ状に堆積した石の山となり、石材は広範囲に散乱している。当時の構造や形状が明らかにできない限り復元を行うことはできない。調査後、復元作業を実施することが出来ない可能性も考えておく必要もあった。

積石塚で内部構造まで発掘する調査や解体復元工事は国内でも初の試みであり、参考となるような資料は殆ど無く、手探りでの事業着手となった。発掘調査によって本来の形状を知ることが本当にできるのか。大きな不安を抱えながらの調査着手であったが、予想以上の成果を挙げ、本整備事業に辿り付くことができた。

以下年次別に、発掘調査や保存整備工事について解説する。

### ①平成9年度事業 トレンチによる墳丘の遺構確認調査

当該地は大麻山の高所でキャンプ場に隣接するが、墳丘を含めその周囲には松のほか大きなコナラや桜などの広葉樹が多数繁茂している。数年に1度程度の管理は行っていたものの、毎年堆積する多量の落葉が石材の隙間に厚く溜まり腐植土となり、またそこに低木や葛が生え墳丘全体を完全に覆う状態であり、冬季以外は積石塚としての外観を把握することすら困難な状態であった。

そこで墳丘の測量を行うため、伐採と腐植土の除去作業を実施した。当該地は瀬戸内海国立公園特別地域内であったため比較的育った樹木類は残し、低木や葛類の除去作業を実施したが、積み石の隙間に溜まる腐植土は想像以上に多くこの作業に多くの時間を費やした。

これまでに実施してきた通常の管理作業範囲は墳丘部分のみであったが、今回は作業をより広い範囲で行った結果、後円部の石材はかなり広範囲に散乱していることが判明した。

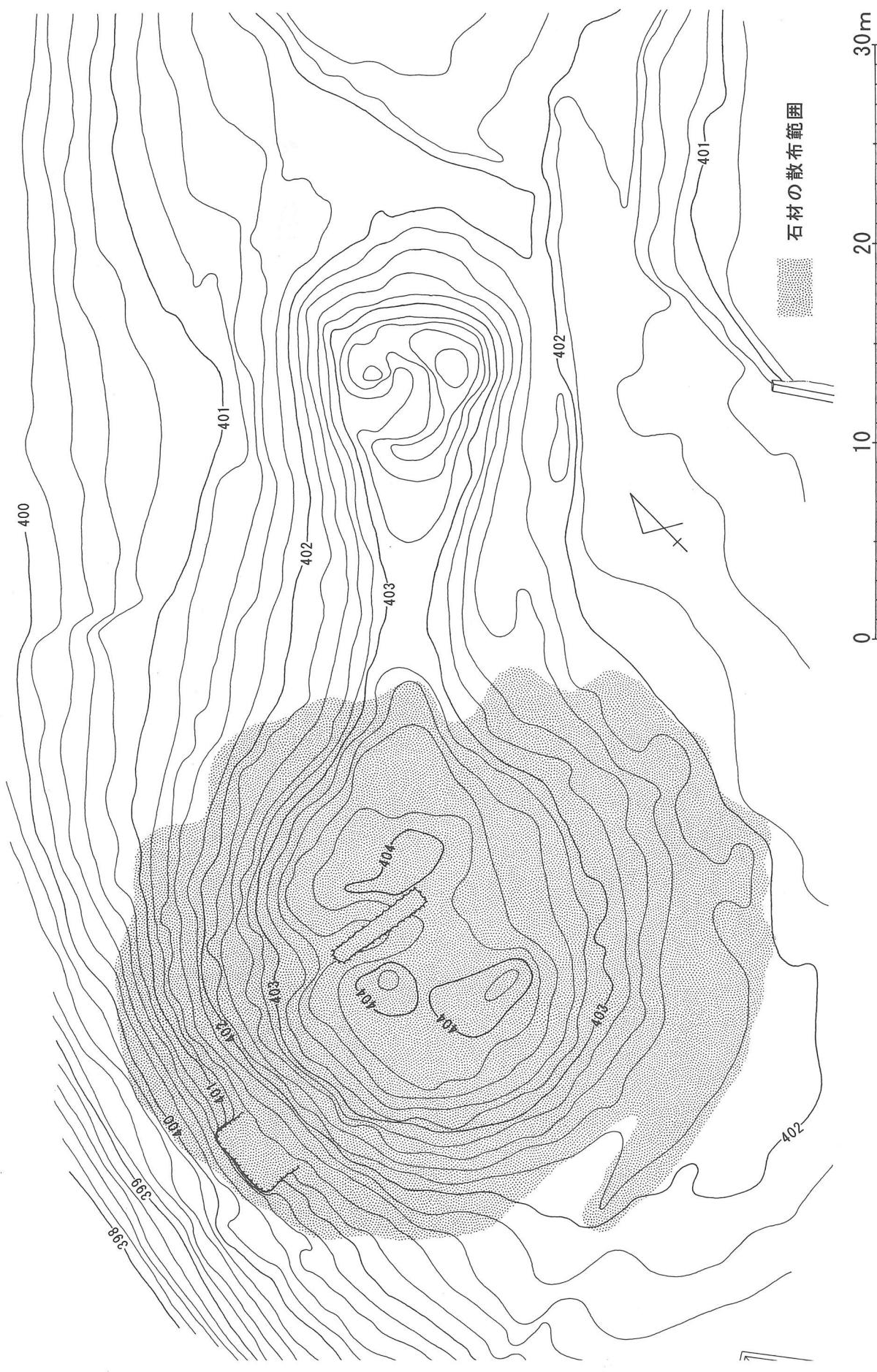
伐採作業を終了後、まず地形測量作業に着手し



第11図 後円部の伐採作業風景(南から)



第12図 野田院古墳全景(南西から)  
伐採・清掃作業後の状況



第13図 野田院古墳地形測量図

たが、後円部では清掃作業や測量作業に伴う石材は容易に動く状態で、表層の石材は極めて不安定な状態であった。

測量調査の結果、盛土で構築されたと考えられる前方部の墳裾部は比較的明瞭であったが、後円部は石材が広い範囲に散乱しており測量による正確な墳裾部の把握は困難であり、詳細は発掘調査で確認することとした。

香川県を中心に瀬戸内海沿岸部に分布する古式の積石塚の本格的な発掘調査は殆どなく、その手法から考える必要があった。しかしながら、野田院古墳の本来の形状がどのようなもので、どのように崩れているのかが全く不明である以上、崩れ原位置を留めていない石材を慎重に除去し、原位置を保った石材を確認するしか無いと判断された。現位置を保った石材が確認されない場合は野田院古墳の復元作業が実施できない可能性も考えられたが、測量完了後、墳丘の規模や形状を明らかにするため計10箇所にトレンチを設定し墳丘の基底部を確認する作業に着手した。

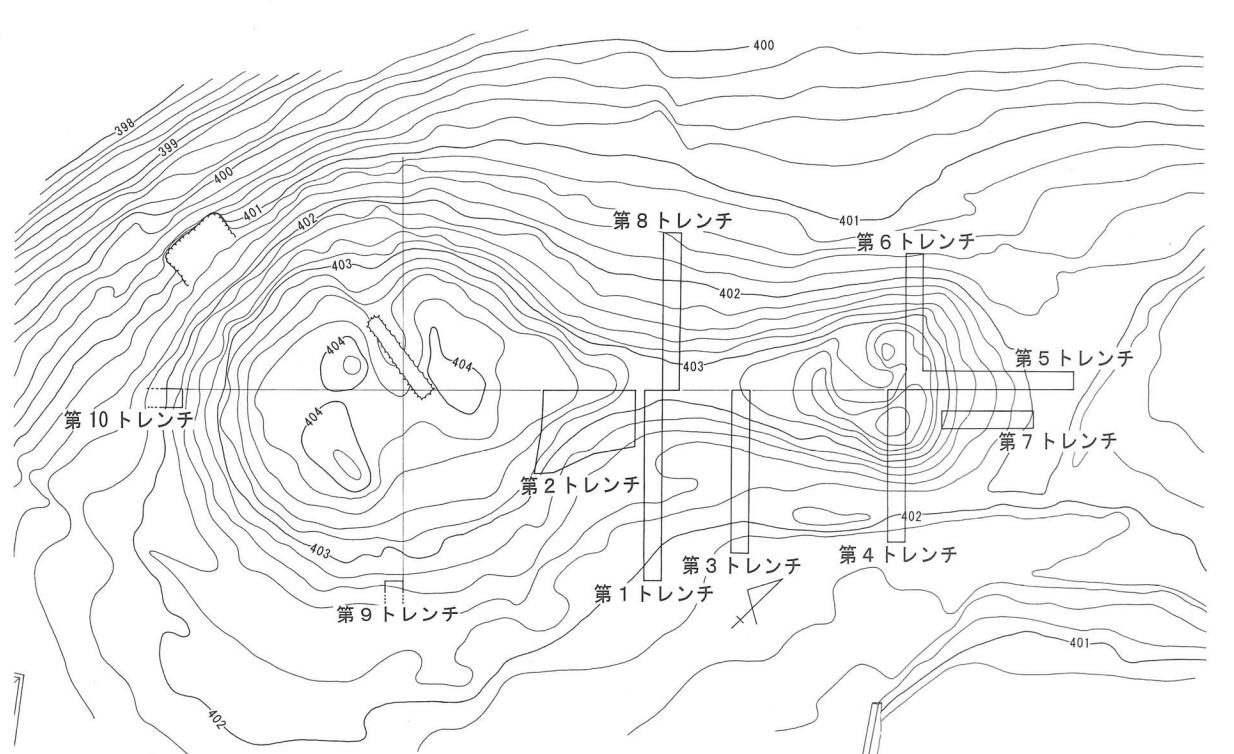
**第1トレンチ** 墳丘南東側でくびれ部からキャンプ場側の平坦部にかけて幅1m・長さ11mで設定した。

前方部は現状では表面に露出する石材は少ないが、地表面付近の笹の根が密集する腐植土層を除去



第14図 野田院古墳全景(南東から)

清掃後は積石の後円部(左)と盛土の前方部(右)が明瞭である



第15図 トレンチ配置図

すると後円部に積まれている石材と同様の安山岩が多数姿を現した。墳丘の石材と比較して小さな石材ばかりであるが、基底部の線に沿って柱状の大型石材が並べられている。同様の列石はその上方にもう一列認められる。

一面に見える小型の石材群は10~20cm程度のもので、列石の間や前方部法面に葺かれたものであるが、墳頂部に近づくと石材は希薄になり、墳頂の平坦部では全く見られなくなる。前方部の地形や周囲の状況から判断して転落したものではなく頂部付近には石が葺かれていなかった可能性も考えられる。

基底部列石から南西側には幅3.5m程の平坦地形が続き、ここには墳丘から転落したと思われる石材群のほか、地山中に含まれる安山岩塊も部分的に露出している。この平坦地形は古墳築造に伴い削平されたものと思われる。

これより南西側は徐々に下る傾斜面となっている。野田院古墳の南東側は広い平坦地形となっているが、以前は窪地であった部分をキャンプ場として活用するために多量の土砂を客土したものであり、本墳が尾根の先端に造られたものであることがわかる。

また調査中に基底部付近を中心に比較的大きな壺形土器（土師器）片が多数出土しているが、小さな破片ばかりであり原位置を留めているものは認められない。

**第2トレーニング** 第1トレーニングによって前方部の基底部列石が確認されたため、これをくびれ部側に追い、くびれ部や後円部基底部を確認する目的で第2トレーニングを設定した。検出範囲は第1トレーニングから50cmの間隔を置き、前方部墳頂部から基底部列石までの幅で後円部に向かい検出を続けた。

調査の結果、後円部に近づくに従い前方部の幅は広くなり、やがて前方部基底部列石は後円部の基底部にぶつかって止まった。くびれ部付近では列石が数段積まれている部分も認められる。中段の列石は基底部列石と平行して後円部基底部列石と接合しているがここでは数段積まれた後円部基底部に乗り上げており、2本の列石の構築に時間差があることがわかる。

後円部基底部側面は石垣状にほぼ垂直に積まれている様子が確認できた。崩落した上部の石材が基底部の低い部分の石材を抑え保護しており、後円部基底部全体が同じような遺存状態であれば後円部の平面的な形状が把握できるものと、大きな期待が持てた。

また第1トレーニング同様、調査中に基底部付近を中心に比較的大きな壺形土器片が多数出土した。原位置を留めているものは認められないが、口縁部の大きな破片を含めて第1トレーニングより密度の高い出土状況であった。

くびれ部付近の前方部墳頂部では扁平な巨石が密集して配置されている状態で検出されている。その上面は前方部から後円部に緩やかに登るスロープ状になっており、石材の隙間から少量の土器片が出土した。意図的に構築された構造物であることは疑いないが、その性格は不明である。

**第3トレーニング** 前方部南東側中央部からキャンプ場側の平坦部にかけて幅1m・長さ約9mで設定し



第16図 第1・2トレンチ実測図



①調査前のくびれ部の状況(南から)



⑤第1・第2トレンチ検出状況(南から)



②調査前の前方部の状況(南西から)



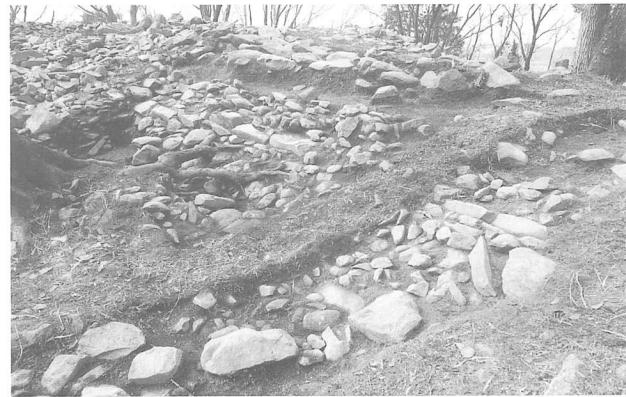
⑥くびれ部の検出状況(南東から)



③調査前の前方部の状況(南東から)



⑦後円部基底部検出状況(東から)



④第1・第2トレンチ検出状況(東から)



⑧くびれ部上の配石遺構検出状況(北東から)

第17図 第1・第2トレンチ検出状況

た。検出状況は第1トレンチと同様であるが、崩落が著しく基底部や中段の列石は確認できておらず、土器片の出土量も極めて少ない。

基底部付近から南西側には2m程の平坦地形が続き、そこには墳丘から転落したと思われる石材群が散乱しており、この南西側は徐々に下る傾斜面となっている。

**第4トレンチ** 墳丘南東側の前方部先端部の最も幅が広い部分でキャンプ場側の平坦部にかけて幅1m・長さ約9mで設定したが、墳丘側は枯渇した松の根に阻まれたためトレンチの南東側約6m範囲の調査となった。

第3トレンチと同様に法面部分の崩落は著しく基底部や中段の列石は確認できていないが、使用されている石材には比較的大きなものが含まれている。

他のトレンチと同様に法面上方の石材は希薄であるが、墳頂部付近には松の根により崩落を免れたものと思われる比較的大きな石材の集まりが認められた。前方部先端部は高く造られており、この周囲は極めて急な傾斜になっている。

石材が認められない部分については、急斜面であるための崩落によると考えられるが、他の部位とは異なる石材の葺き方があった可能性も考える必要もある。

墳裾部と推定される位置より南東側に平坦部は認められず、傾斜面が続いている、削平された尾根幅いっぱいに前方部が造られているようである。土師器片の出土量は少ない。

**第5トレンチ** 墳丘の主軸に沿って前方部先端から北東方向に幅1m・長さ約9.8mで設定した。

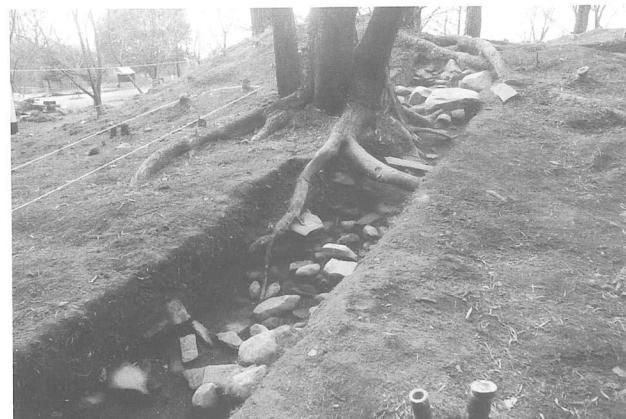
第4トレンチと同様に法面部分の崩落は著しく中段の列石は確認できていないが、基底部と想定される位置で大型の柱状石材が検出されている。ここではその北東側が浅い切通しの地形があり、最後に尾根を切断し、墳丘を明確にする作業があったことがわかる。



第18図 第3トレンチ検出状況(東から)

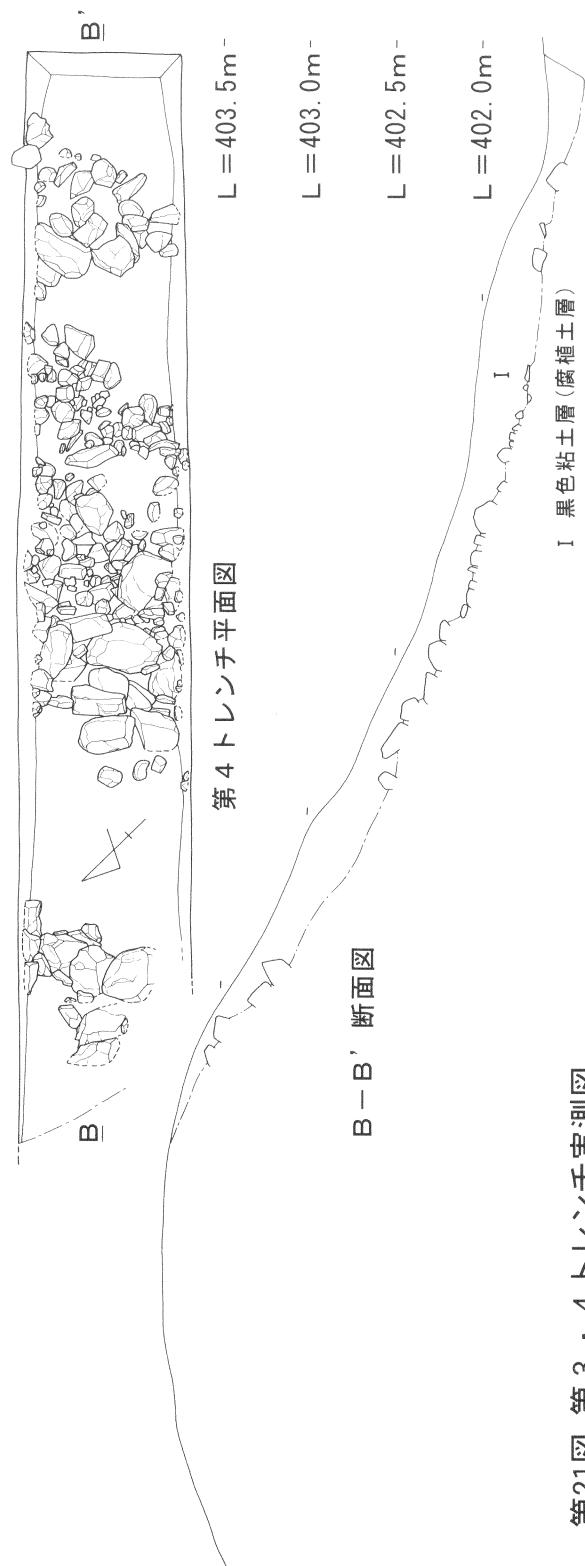
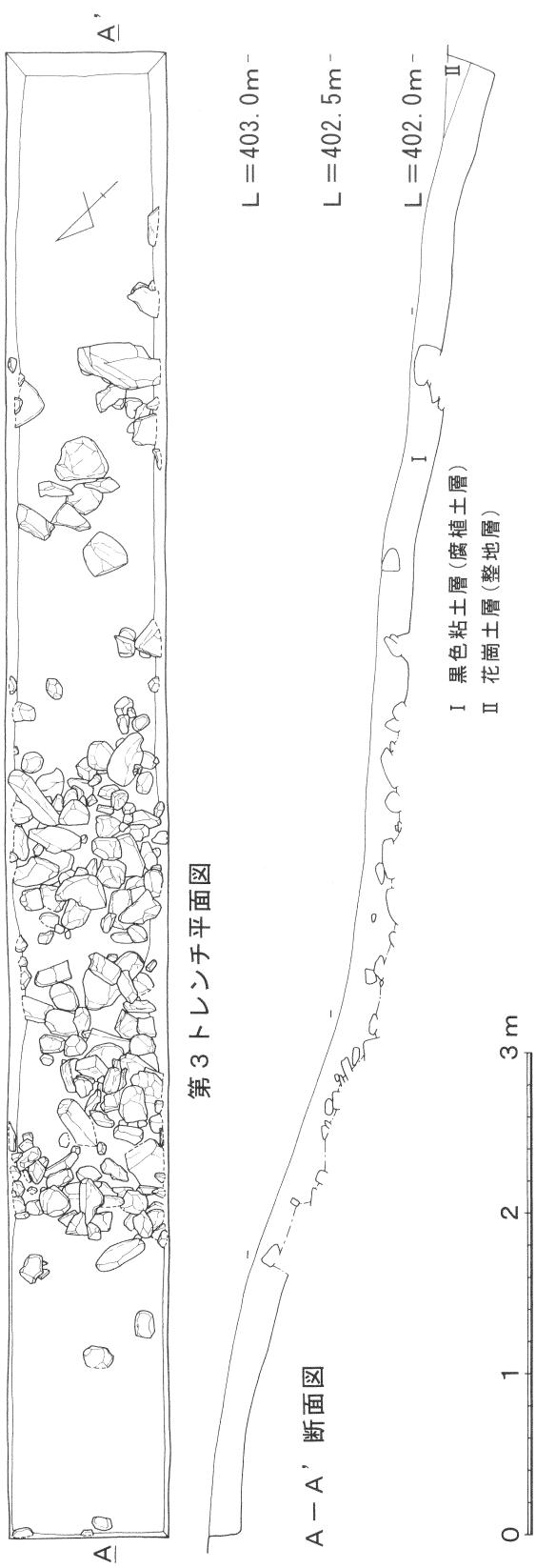


第19図 第4トレンチ検出状況(東から)

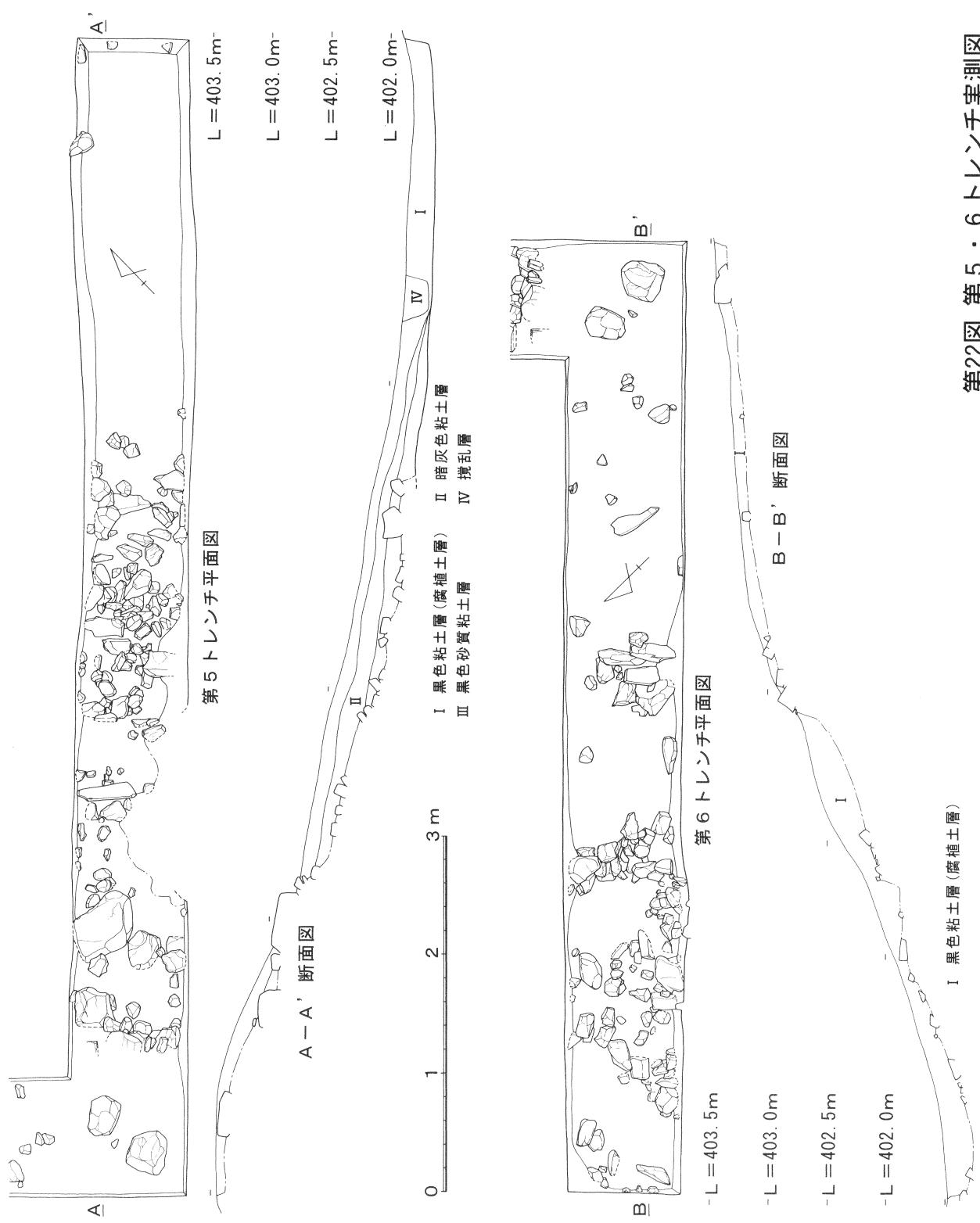


第20図 第5トレンチ検出状況(北から)

第21図 第3・4トレンチ実測図



第22図 第5・6トレンチ実測図



また、ここでも第4トレンチと同様に法面に大きなブロック状の石材が多数残されている。桜の巨木の根により崩落を免れたものと思われるが、造園関係者に聞くと木の樹齢は50～60年程度である。

石材の崩落が最近起きた可能性と併せて、戦後の入植者が前方部の北東方向約20m程の位置に石積みの家を造っており、その際に前方部に露出した石材を抜き取り使用した可能性も考えられる。

この状況からみて、前方部先端周囲の急勾配の側面には大型石材を多用した葺石が上方まであったものと思われる。ここで出土した土師器片は極めて少ないが、野田院が機能していた時期の所産と考えられる瓦器・土師器片が出土している。

**第6トレンチ 第4トレンチの反対方向（北西側）**  
に幅1m・長さ8.2mで設定した。

ここでも法面の石材の崩落が著しく、基底部や中段の列石は確認できていない。また墳丘の北西側は平坦ではなく、緩やかな傾斜面となっており平坦部が認められないため、傾斜が変化する部位を墳裾と想定した。

**第7トレンチ 前方部先端に設定した第5トレンチの検出状況だけでは不十分と考えられたため、その南東側に、平行して幅1m・長さ5.4mの第7トレンチを設定した。**ここでは第5トレンチで基底部を想定した部位で検出された柱状石材の延長上で、基底部を示すとみられるブロック状の石材が検出された。また基底部付近には多くの葺石が認められたが、土師器片の出土はわずかであった。

**第8トレンチ 第1トレンチの反対方向（北西側）**に幅1m・長さ9.2mで設定した。

ここでは中段に大きな柱状石材が現位置を保った状態で残されている。その下方には多量の石材が堆積し、その隙間には基底部と思われる石列が認められる。

土器片は小さなものばかりであるが、比較的多く出土している。このトレンチを設定した位置は前



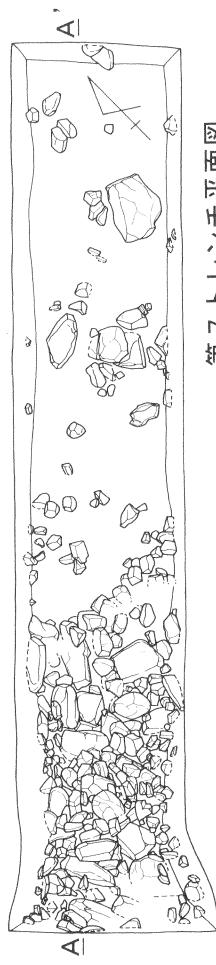
第23図 第6トレンチ検出状況(北から)



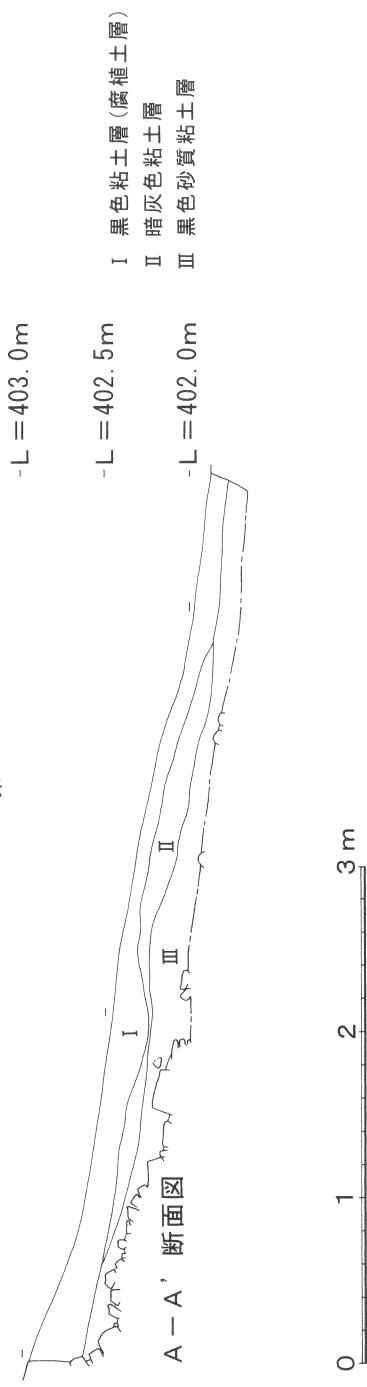
第24図 第7トレンチ検出状況(北から)



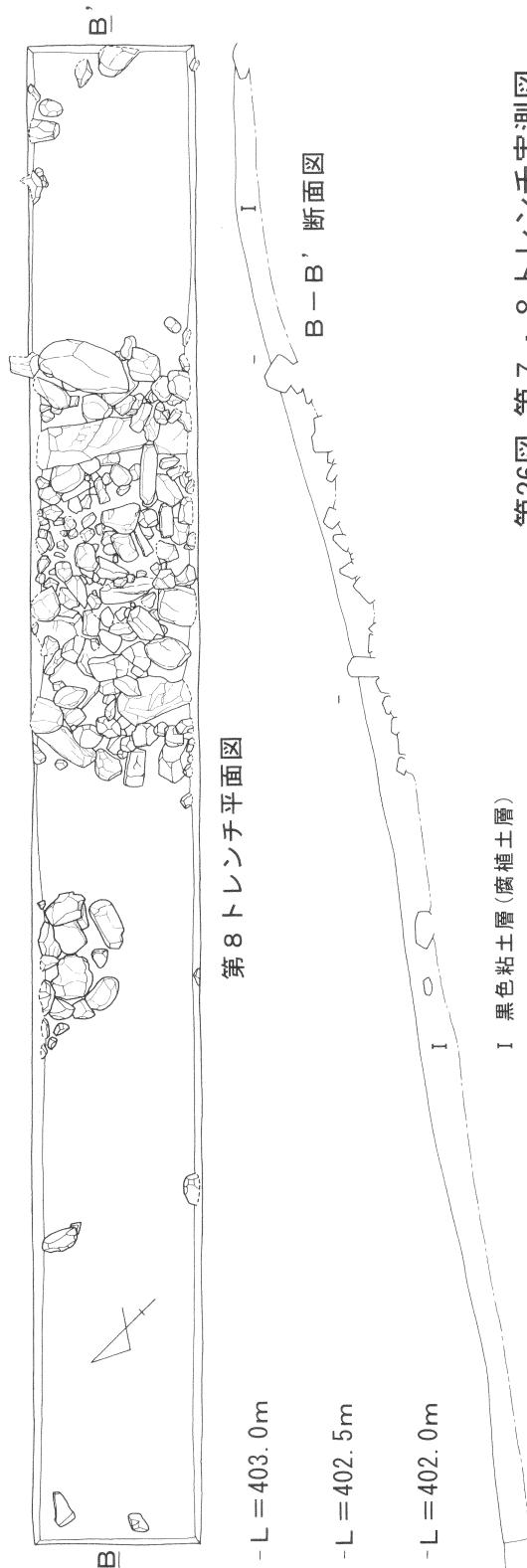
第25図 第8トレンチ検出状況(西から)



第7トレンチ平面図



-L = 402. 5m      I 黒色粘土層(腐植土層)  
 -L = 402. 0m      II 暗灰色粘土層  
 -L = 402. 0m      III 黒色砂質粘土層



第8トレンチ平面図

-L = 403. 0m  
 -L = 402. 5m  
 -L = 402. 0m

第26図 第7・8トレンチ実測図

I 黒色粘土層(腐植土層)

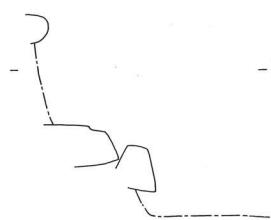
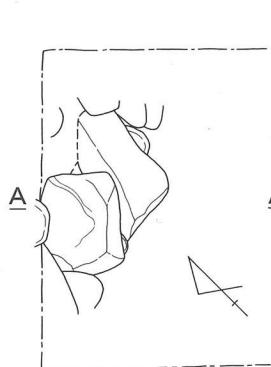
方部で幅が最も狭い部位であり、この北西側には広い緩やかな傾斜の自然地形が広がっている。

**第9トレンチ** 第2トレンチで後円部基底部の遺存状況は比較的良好と判断されたため、他の部位が同様の状況であるか否かを確認するためのトレンチを、後円部の中心と思われる場所から墳丘の主軸方位に直行するよう後円部南東側に幅1m・長さ2mで基底部推定位置に設定した。

第2トレンチでの調査では、ほぼ現位置を保つ石材、移動しているものの構築当時の位置がほぼ明らかにできる石材、その形状から本来の位置は不明であるが基底部側面に使用されていたと思われる石材を把握することができる状態で後円部基底部の一部が下層に残されていることが判明している。

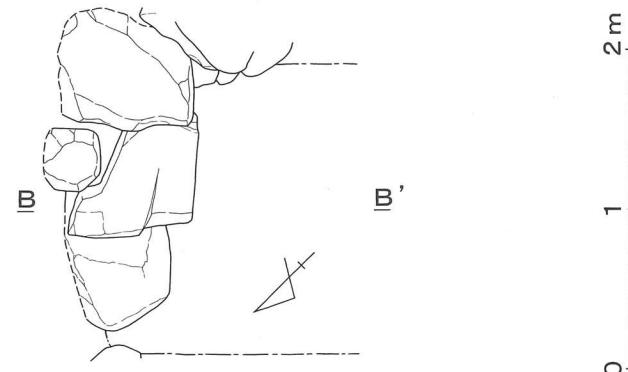
その調査結果を参考に慎重に作業を続けた結果、基底部側面に使用されていたと見られる石材が地山直上に集中して確認でき、確実な基底部の確認ではないものの基底部が極めて近いと判断された。幅の狭いトレンチではその状況が把握し難いためこの状態で記録し保存した。

第9トレンチ北西端平面図



A-A' 断面図

第10トレンチ北東端平面図



B-B' 断面図

第28図 第9・10トレンチ実測図

**第10トレンチ** 第9トレンチと同様に後円部の中心と思われる場所から墳丘の主軸方向側に沿って幅1m・長さ2.5mの調査区を後円部の南西側の基底部の推定位置に設定した。ここでは形の整った3点の石材が並んだ状態で検出されたため基底部であると判断された。

検出された石材のレベルは第9トレンチで確認された石材とほぼ一致する。墳丘の南東側は地山を削平した部分に構築しており基底部はほぼ水平に推移するが、この位置は尾根の傾斜部であるため地山は第9トレンチ付近より少し低くなっている。

またここで確認された石材群の下には、小口を揃えて積まれた石材が続くことが判明したため、この部位では後円部基底部石材が数段保存されていることが判明した。

このように後円部基底部の下部構造は全体が残されている可能性が高いばかりか、保存状態が良好であるものと思われたが、後円部の北西側は尾根の傾斜が大きく、基底部上に堆積した石材の量が極めて多いため、トレンチによる調査はここで断念し、今後の調査で後円部基底部全体の検出を考えることにした。

**第2主体部の確認** 墳丘の測量調査によってこれまでに知られていた堅穴式石室は墳丘の中心から大きく北に外れており、この南側にもう1基の堅穴式石室が存在していると考えられていた。

初年度の調査としては保存整備事業の検討に必要な基礎資料を全て整えておく必要があったため、平成9年度最後に主体部の確認調査を行なった。

まず石室の位置を想定した場所で石材の除去を開始したところ、現況表面から比較的浅い位置で堅穴式石室の壁面を確認することができたため、これを第2主体部とした。最初に確認された部位は、第1主体部と平行し東西に長い石室の北壁の東端付近であり、石室東端には蓋石が2点ほど原位置(1点は石室内に転落)に残されていたことから、遺存状況は極めて良好であると判断された。

本年度は石室の位置や平面規模のみを確認することだけを目的としたため、石室の上部のみの検出を続け、北側壁面から両小口を経て南側壁面を検出したが、南側壁面中央部は盜掘により大きく抉ら



第29図 第10トレンチ検出状況(西から)



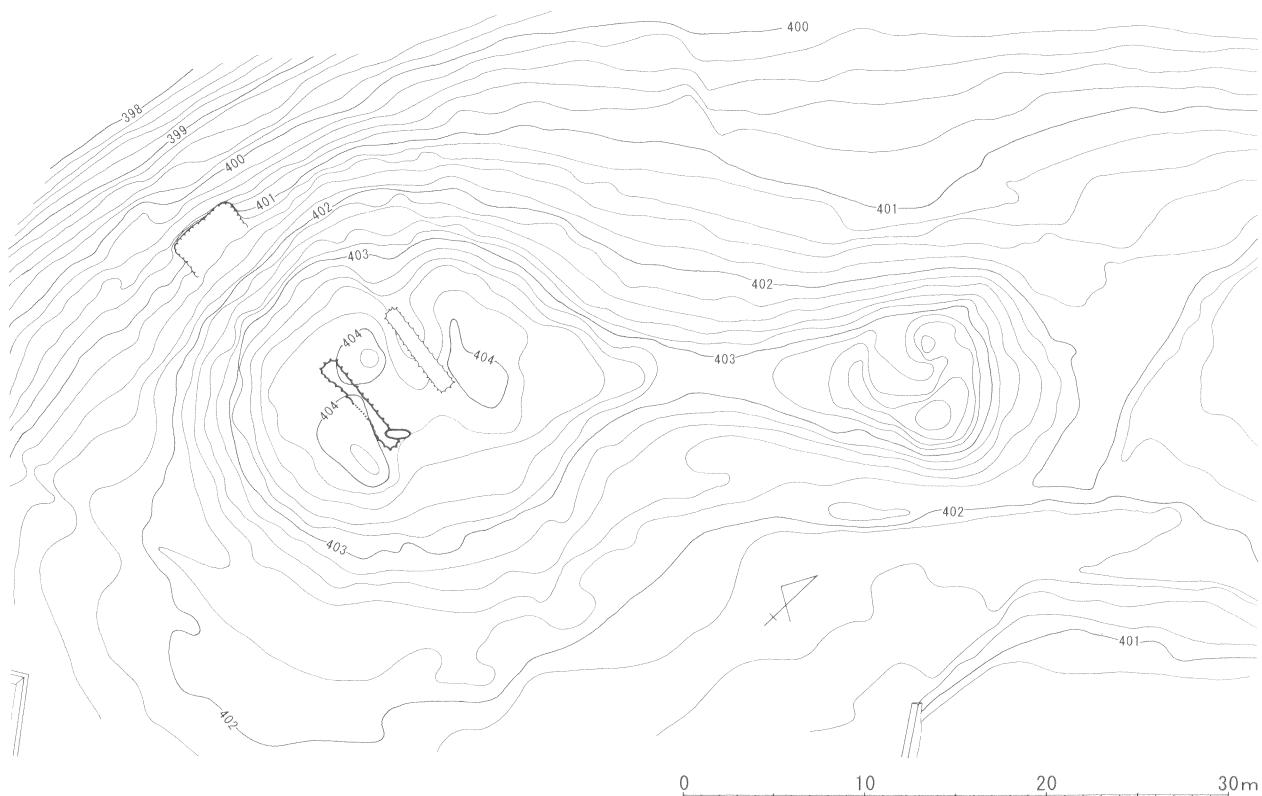
第30図 第2主体部検出状況(南西から)



第31図 第2主体部検出状況(西から)

れ、その周囲は石室内部に大きく孕み出していることが判明した。

第2主体部の規模は検出範囲内で全長約5.7m、幅0.8m前後であった。約4mの間隔をおいて造られた第1主体部の全長5.15m、幅0.7~0.9mと比較して明らかに長いことがわかる。第1主体部の高さは約1mであり、第2主体部も同様の規模と考えられたが、内部の調査については調査整備委員会に判断を委ねることとした。そこで検出範囲を土嚢で固定し平成9年度の現地での作業を終えた。



第32図 第2主体部位置図

**調査整備委員会** 史跡有岡古墳群保存整備事業実施に際しては、事務局の計画について指導や助言を行なう調査整備委員会を設置している。

平成9年度は発掘調査実施前に第1回目の委員会を開催し、その計画についての協議を行い、調査結果がまとまり平成10年度事業を計画する時点で2回目の委員会を開催した。委員会での結論は次のとおりである。

『墳丘の一般的な復元整備の手法では、オリジナルの墳丘を保存するためその上に土を盛るが、野田院古墳は積石塚である。質感を変化させないように別の石材を周囲に積むには膨大な量の石材が必要となるが、同様の石材の入手は不可能に近い。また石材が確保できたとしても、その重みにより遺構が破壊される恐れがあるうえ、石室との位置関係も大きく変わってしまう。』

そこで墳丘の形状を更に明らかにし、オリジナル部分を尊重しながら現場に残された石材を用いて復元することが望ましいが、そのためには本来の構造を確認するため更に墳丘の発掘調査を続けることが必要である。

また、新たに確認された石室は大きく変形しており、公開活用を考えるとこの状態での保存は難しい。内部の発掘調査を実施する一方、盗掘により破壊された部分で墳丘と石室の構築の工程なども調べる必要がある。』

以上の結論を基に平成10年度の事業を実施することとなった。

調査整備委員会組織は以下のとおりである。  
(役職は平成15年3月31日現在)



第33図 調査整備委員会開催風景

委員長 松浦 修 善通寺市文化財保護審議会代表

～平成11年度から～

谷口経孝 地元代表（元西部地区連合自治会長）

副委員長 町田 章 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所 所長

～平成10年度から～

小林謙一 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所

埋蔵文化財センター情報資料室長（考古学）

委員 内田昭人 独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所

修復技術部 応用技術研究室長（保存工学）

委員 丹羽佑一 香川大学経済学部教授（考古学）

委員 吉田重幸 元香川大学農学部教授（造園学）

(指導) 本中 真 文化庁記念物課 文化財主任調査官

(指導) 香川県教育委員会 文化行政課

(事務局) 善通寺市教育委員会 文化振興室

平成9年度決算額	
総事業費	3,005,084円
国庫補助金	1,500,000円
県補助金	500,000円
市費	1,005,084円

事業内容及び執行額	
・発掘調査経費	2,720,317円
・調査整備委員会経費	139,080円
・事務経費	145,687円